



# ファッションとごみ減量

第15回さっぽろスリムネットフォーラム  
報告書



## 目次

■開会挨拶	2
■第15回さっぽろスリムネットフォーラム	3
・講演会Ⅰ	
サステナブルファッションー衣服と人と自然のつながりー	
・講演会Ⅱ	
動き始めたサステナブルファッション	
・トークディスカッション〔質疑応答〕	
ファッションとごみ減量	

### 【 開催概要 】

- 開催日時 / 2022年3月4日（土）13：30～15：15（開場13：00）
- 会場 / 国際ホール（札幌市中央区北4条西4丁目札幌国際ビル8階）
- 主催 / 札幌ごみ減量実践活動ネットワーク
- 運営 / 特定非営利法人 環境り・ふれんず
- 参加者数 / 44名



# さっぽろスリムネット フォーラム開催にあたり

札幌ごみ減量実践活動ネットワーク  
委員長 寺嶋 忠雄



本日は、お忙しい中をお集まりいただき誠にありがとうございます。また、皆様には、日頃からごみの減量にご協力いただき、この機会に改めて感謝申し上げます。

札幌ごみ減量実践活動ネットワークは、愛称を「さっぽろスリムネット」と言い、平成17年3月に設立され、市民・事業者・札幌市が一体となって、札幌市のごみを減らすための仕組みづくりや市民の皆さんへの広報など数多くの活動を行って参りました。ごみ減量に関する情報共有や意見交換の場として開催しているこのフォーラムも、おかげさまで15回目を迎えたところです。

さて、今回のフォーラムのテーマは、「ファッションとごみ減量～持続可能なファッションにチェンジ!～」です。環境省によれば、日本では、年間48万4千トンの衣服が焼却・埋め立て処分されているとされ、これは平均すると1日あたり大型トラック約130台分に相当します。

札幌市においては、家庭ごみの組成調査から、年間8千トン前後の衣類がごみとして排出されていると推計されています。市では衣類ごみ減量のため、平成26年10月から主に東南アジア等へ向けた海外輸出ルートを利用した古着回収を始めました。年間、170トン程度の回収があり、市のごみ減量に一定程度寄与してきました。

ところがコロナ禍で輸出が止まったことで、令和2年5月から約一年半にわたり回収停止を余儀なくされ、輸出に頼ることの問題点が見えました。

さらに、古着の輸出は先進国から発展途上国へと世界的に行われていますが、輸出先国の一部において大量の古着が不法投棄され、有毒ガスを発生させるなど深刻な環境汚染を引き起こしている事例があることが、報道されるようになってきました。

このような状況から衣類ごみ減量のためには、できる限り国内で循環させる仕組み作りが必要であり、さらに、衣服の大量消費・大量廃棄を前提とする現在のファッションのあり方そのものを見直し持続可能なものになるように、つまり「サステナブルファッション」を進めていかなければなりません。

今回のスリムネットフォーラムでは、「サステナブルファッション」について国や業界の最前線でご活躍されている方を講師に招き、今後、衣類ごみの減量をどのように実現していけば良いのか、市民の皆さんと一緒に考える機会になれば、と考えております。

最後に本フォーラムの開催にあたり、講師を快くお引受けいただいた鎌田様、岡野様に深く感謝の意を表しますとともに、このフォーラムが実り多いものになることを祈念いたしまして、私の挨拶といたします。



## ■講演会 I

### サステナブルファッション –衣服と人と自然のつながり–

#### 【講師ご紹介】



#### 鎌田安里紗

##### エシカルファッションプランナー

一般社団法人 unisteps 共同代表で、エシカルファッションプランナーとして衣服の生産から廃棄の過程で、自然環境や社会への影響を意識する" エシカルファッション " に関する情報発信を積極的に行い、ファッションブランドとのコラボレーションでの製品企画、衣服の生産地を訪ねる スタディ・ツアーの企画等を行っている。

皆様こんにちは。ファッションにはあまり興味ないという方もいるかもしれませんが、今、皆さん、服を着ていらっしゃるんですよね。衣食住という言葉があるくらい、服というのは人にとって切っても切れない関係にあります。

人間以外の虫や動物は服を着ません。でも人間は、暑さ寒さから身を守るためにも服を着ないといけませんし、社会的にコミュニケーションの一つとしても服は非常に重要な役割を果たしています。

私はユニステップスという一般社団法人の共同代表を務めています。ユニステップスは「多様性のある健康的なファッション産業に」ということをビジョンに掲げています。ファッション産業や自然環境にはいろいろな課題がありますが、この課題が少しでも良くなればと、活動をしています。

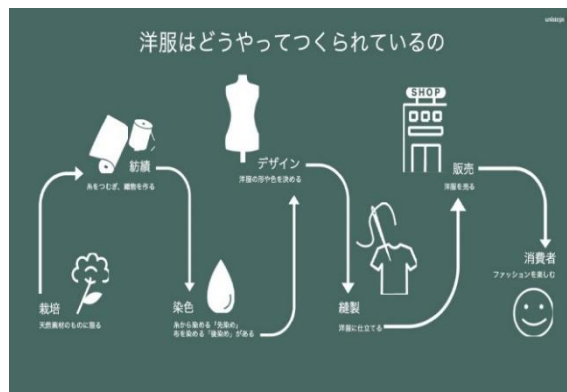
環境省の森里川海プロジェクトというプロジェクトでアンバサダーもさせてもらっています。私たちの生活は自然資源から何かしらの恩恵をもらって成り立っていますが、都市で暮らしていると、そのことを実感しにくい。自然のつながりを感じながら生活をしていくにはどういう暮らしが望ましいのか、環境省さんと一緒に発信させて

もらったりもしています。

衣服がそもそもどうやって作られているのか、皆さんもちろん、なんとなくご存じだと思いますが改めて振り返ってみたいと思います。

ファッションと農業ってイメージとしてはなかなか結びつきにくいんですが、コットンやリネンなど、いろいろな衣服の材料が植物からできていて、その場合は農業から服作りが始まります。

ウールやカシミアのような動物性の素材であれば、牧場で動物を育てるところから始まりますし、ポリエステルやナイロンのような石油由来の素材であれば、石油を取るところから始まります。



衣服というのは、必ずそうやって自然資源を地球からもらい、それを何かしら人が



手を加えて素材にしています。その後、紡績にし、それから生地ができて、染めてデザインをします。それを切って、縫って、ようやく一着の服ができるのです。

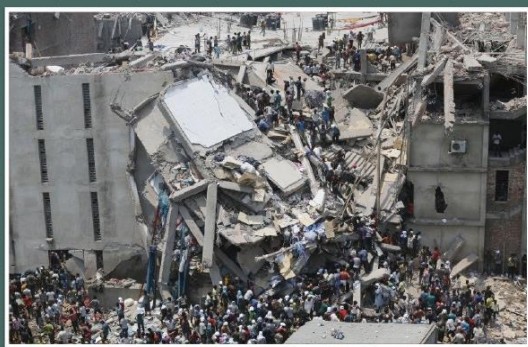
私たちが普段、服を見るのは店頭で並んでいるところですが、店に並ぶ前のプロセスというものが非常に長いんです。

今、日本で売られている洋服の98%以上が海外で作られています。国内で作られている服は1%弱です。30年前は半分ぐらいが国内で作られていたのですが、作る時の人件費が安いなどの事情から、どんどん洋服の生産が海外に移っています。そうするとこのプロセスがどんどん遠くなっています。

例えばインドでできたコットンを中国に持って行って、生地にして、次に別の国で染めて、また中国に戻して縫うなど、いくつかの国をまたいで生産されているものがほとんどです。そうすると、どんなふうに物が作られているのか？そこで自然環境にどんな影響があるのか？そこで働いている人がどんなふうに働いているのか？ということとその服を発注しているブランド側がなかなか把握できなくなっている。

それが今のファッション産業の一つの課題だと思います。

### ラナ・プラザ倒壊事故



そのような状況の中で、ちょうど今から10年前の2013年4月24日、バングラデシュで大きな事故が起きてしまいました。

縫製工場が入っている8階建ての建物が倒壊してしまい、1,100人以上の方が亡くなったのです。ラナ・プラザというビルだったので、「ラナ・プラザの倒壊事故」と呼ば

れています。

一番問題だったのは、事故が起きる前日に、建物にヒビが入っていて壊れそうなことに従業員たちが気づいていたということです。従業員が工場長に「危ないから、明日は働きたくない」と伝えていたにもかかわらず、「納期が間に合わないから明日も仕事するように」と言われたそうです。

働いているのは、10代後半から20代の若い女性がほとんどでした。翌日、出社をしてミシンつけると、その振動もあり、就業してわずか10分後ぐらいに倒壊してしまったのです。

これは防げたはずの事故だったんです。その工場は欧米のファッションブランドからの受注を受けていたんですが、納期に遅れてしまうと、もう次から発注してもらえないんじゃないかとか、労働者の人からすると明日出社しないと給料がもらえないんじゃないかとか、いろいろな非常に弱い立場に置かれている人たちが、この事故に巻き込まれてしまったのです。

ファッション産業全体が価格を落としていかないと、企業同士の競争に負けてしまうという状況が生まれている中で、弱い人にしわ寄せがいつてしまっています。

ブランド側も先ほどお話したように、生産プロセス遠くて見えにくくなっている中で、気づかぬうちにこういったひずみを生んでしまっています。それ以外にも、生態系や水や土など、様々なところへの影響も見えにくくなっています。

大量生産や、動物から素材をいただく場合にその動物が育てられる環境があまりよくないこともあるなど非常に多くの課題がある中で、これらを少しでも良くしていこうという働きかけの総称が、サステナブルファッションと呼ばれているものです。

例えば労働環境に関しては、働いている方と対等なパートナーシップを結ぶフェアトレードや、生物多様性に配慮してものづくりをすること、適量生産をすること、さらに、動物の暮らす環境を考えて動物を飼育するなど、いろいろな観点があります。

こういったことが少しでもファッション産業に広がっていくことが重要だと思います。



私がこういった活動を始めたきっかけも、少しだけお話をさせていただきます。私は10代後半から20代前半は、アパレル販売員のアルバイトをしながら、10代向けのファッション誌でモデルの仕事をさせてもらっていました。私が店頭に立ち始めたのは高校一年生のときで、それが2008年です。2008年というのは日本にH&Mの1号店ができた年なんですけど、当時、トレンドの服が安く買える場所ができたことが非常に嬉しかったのを覚えています。

自分自身もそういった場所でよく買い物をしていたんですが、その頃から、日本の衣服の平均価格が、全体的に大きく下がったんですね。おそらく皆さんも服の価格の変遷を振り返ると、すごく安くなったなあと思われると思うんですが、私の働いていたブランドにお買い物に来るお客様もやっぱり価格にどんどんシビアになっていました。「このブランドが好きだから、お金を貯めて買いに来ました」と言っていたお客様が少し減り、「似ているデザインだったら安い方がいい」という方向に変化しつつあるのを感じました。

自分自身もそうだったんですが「安くて使えそう」と買った服は、2、3回着るとすぐ飽きちゃったりするんですね。家にもたくさん服があり、何を着ようかと思っても、すごく気に入っているとかが今日着たいなと思える服がなかなかなくて、また新しい服を買いに行く。服はたくさんあるのにどうしても大事なものというのはなくて、

どんどん買い替える状況。それがもったいないなと思いました。そして、もう少し違う形の服との関わり方はないかなと考え始めたのです。

その頃に、自分が働いているお店の服と、なぜこんなに価格が違う服があるのかということが気になり、洋服が作られている現場に足を運ぶようになりました。その物作りの現場がすごく面白かったです。

この服ができるまでに糸を紡ぐ工程だけでも、これだけの工夫があって、こんなにたくさんの人が働いていて、今度は生地屋さんがまた工夫をして……。それまで私にとってファッションを楽しむということは、いろいろな服を組み合わせでコーディネートすることだと思っていました。

でもそれだけじゃなくて、プロセスを知り、それを踏まえてその服を着る喜びというものもあるんだなと知りました。

ただ、ファッション雑誌にはそういう企画はありませんでした。「一週間で5,000円以下のプチプラコーデ」のような企画はたくさんあったんですけど、ものづくりの過程や課題を知る機会がなかなかない。

そういったことをより多くの人にシェアできたらと思って発信を始めたことが、今の仕事に繋がっています。



2000年から2014年の間に、世界で服を消費する量が約2倍になったと言われています。一方、人々が服を買う量が60%多くなって、かつ、買ってから手放すまでの期間が短くなっています。でも、その服が手放された後にどうなるか、ということが非常に大きな課題です。私が鹿児島市のリサイクルセンターにお邪魔した時は、体育館のような



広い場所に私の身長3倍ぐらいの高さまで服が積みあがっているのを見ました。これは、鹿児島市で一ヶ月間に集まってくる衣服の量だということでした。



イギリスでもだいたい30万トンの古着が毎年埋め立てされているそうです。日本でも海外でも、世界中で服が行き場を失っているということです。

チリのアタカマ砂漠という砂漠では、大量に衣服が不法投棄されているのが一年少し前に問題になりました。いろいろな国から服が届き、港町で引き取られた服が適切に処理されずに砂漠にポンと捨てられてしまっているのです。アフリカでも同じような状況があります。

洋服は一着500円でも1万円でも、かかるエネルギーというのは、だいたい同じなんです。服を一着作るのに、二酸化炭素が25.5キロ出ます。だいたい500mlのペットボトルを255本分作るのと同じぐらいのエネルギーです。水は2,300リットル必要で、浴槽でいうとだいたい11杯分です。

作る時にもエネルギーがかかっていて、それが短い期間で捨てられてしまって、循環できていないことが今のファッション産業の大きな課題だと思います。

でも私たちが普段店頭で服を選ぶときに情報を得ようと思うと、小さな紙のタグや服についている洗濯品質表示、このほんの少しの情報しか得られません。

それに対して、今ヨーロッパの方ではいろいろと法律も整備され、この過程が分かるように表示する仕組みもでき始めているのですが、まだまだ時間がかかるのかなと思います。

私がやっているプロジェクトに「服のた

ね」いうものがあるんですが、これはその名のとおり服を種から育てようという企画です。申し込んでくれた方にコットンの種をお送りして、自宅のベランダや庭で育ててもらいます。

私も毎年、自宅のベランダで育てていて、だいたい5月に種まきをすると夏に白い花が咲きます。11月～12月に気温が下がってくると、それが乾燥してパン！と実が弾け、白いふわふわの綿が出てきます。これを参加者の皆さんの分、とれたものを集めて、みんなで紡績工場に行き、紡績工場のオーガニックコットンと混ぜてもらい、糸から生地を作ります。

そしてみんなでデザインを考えて一着の服を作るという参加型の企画です。だいたい種まきから製品ができるまで一年半ぐらいかかるんですけど、実際これに参加してくださる方々は「服って本当に植物からできているんですね」という感想を持たれます。



実際に育ててみるとそもそも芽が出ないとか、虫が来るとか、いろいろなトラブルがある中でうまく収穫できない人もいます。でも普段、当たり前のように服が生産されて、それがすごく安い価格で買えるということに驚きます。

これまでにシャツや靴下などを作りました。靴下って300円で売られているものもありますよね。物の値段だけを見ると、できるだけ安く買いたいと思うんですが、できあがるプロセスを体感すると、果たしてこれは適正な価格なんだろうか、もしかしたら今まで高いと思っていたものが適正で、安いものが安すぎるのかもしれないといった感想がわいてくるわけです。



いくつかのツアーも開催しました。

例えばカンボジアへのツアーでは、オーガニックコットンの畑で収穫から一緒にやらせていただいて、糸を紡いで機織りをするという体験をし、スリランカでは草木染めをしました。それから日本の岡山のデニム工場のプロセスを見に行きましたし、カシミヤが国の大きな産業であるモンゴルでは、巨大なニット工場を見学しました。

いろいろな現場に行って、その土地の風土に根ざしたものづくりや、最新のテクノロジーを使ってでき上がる服などを見ると、服の見方が変わってくるんじゃないかと思います。

冒頭で紹介したユニステップスの活動についてもお話させてもらおうと思うんですが、ユニステップスは3つの軸で活動していて、1つ目は、企業・行政と一緒に取り組んでいくこと、2つ目がクリエイターと一緒に取り組んでいくこと、3つ目が生活者との取り組みです。企業だけ、またはクリエイターだけ、生活者だけが変わっていてもダメで、それぞれのセクターと一緒に一歩踏み出すことで産業全体が変わっていくと考えています。

1つ目の企業・行政との取り組みとして、2021年にスタートしたジャパンサステナブルファッションアライアンスには立ち上げから関わらせていただき、事務局を務めています。

そこでは、ファッションロスゼロ、カーボンニュートラルの目標を掲げていて、衣類を作ってから手放すまでの中で、単純に燃やしてしまったり、埋め立ててしまったりすることをやめよう、作る過程で出る温室効果ガスを相殺してゼロにしていこう、減らしていこうということを目標に活動し

ています。企業の社長さんや環境省や経済産業省がパブリックパートナーとして一緒に活動しています。

2つ目のクリエイターとの取り組みということですが、ファッションデザイナーの意識が変わっていくことも重要ではないかということで、ファッションフロンティアプログラムというものを2021年にスタートしました。これは、これからファッションデザイナーとして活躍していきたい方に向けたプログラムです。選ばれたファイナリストは、それぞれの問題意識に基づいて服を作ります。例えば捨てられてしまうゴム手袋を使って服を作る人や、一頭の羊を育てるところから関わり、その羊からとれた毛を使って一着のニットを作った人もいました。それぞれいろいろな背景があり、それをデザインに落とし込んでいく。それが評価されるというプログラムです。

一般的にファッションは、いかに美しい服を作るかというところが重視されますが、それだけじゃなくて、社会的な責任も高いレベルで実現できるデザイナーにこれから活躍してほしい、ということで行われています。このプログラムには、ファッション業界だけではなく、建築家や現代美術家や研究者など、いろいろな方に審査員として入っていただいています。



3つ目の生活者との取り組みということについてお話します。

ファッションレボリューションというグローバルキャンペーンがあります。冒頭にラナ・プラザの事故の話をしましたけれども、これをきっかけに世界中で「Who made my clothe (フーメイドマイクロー



ズ)：私の服は誰が作ったの？」という消費者がブランドに聞くという運動が始まりました。



というのも、このラナ・プラザの倒壊事故で、どこのブランドの服がここで作られていたのかということも、やはり関心を集めました。

もし自分が好きだったブランドがこういった事故に関わってしまっていると思うと悲しい、だから、自分が着ている服を作っている環境は大丈夫なのかが気になる、という声があがりました。

着ている服に付いているブランドのタグが見えるように写真を撮り、SNS上でそのブランドにメッセージを届けるんです。

それが事故の翌年の2014年から始まったんですが、それに応える形で「あなたの服は私達が作りましたよ」という、生産者が応えている写真が紹介されました。

どんな方が作っているのか、その環境は安全なのか、きちんと賃金が払われているのか、そういったことを開示して行くキャンペーンがそれ以来ずっと続いています。



今年2023年でちょうど10年の節目なので、この10年で本当に産業が変わったのかをきちんと見ていかなければと思っています。

イベントを通して、ファッション産業の作る過程の透明性をどう高めていくか、手放された服をどうしていくのかをいろいろな方と一緒に考える場作りをしています。

また、ブランドごとの透明性として、情報の開示度をもとに、ブランドの透明性の高さのランキングをつけるという調査があり、これが毎年英語で発表されるので、それを日本語に訳すということをお私達の日本のチームではやっていて、それをシェアする活動をしています。

他には、サステナブルファッションのオンライン講座も主催しています。これはいつでもビデオでサステナブルファッションの基礎を学べる講座なんですけど、思い切って全部無料にしました。誰でもいつでも見えるようになっていきますので、もしご興味があればぜひ見てみてください。

最後に、今日からできることについてお話しします。サステナブルファッションにおいて企業がやるべきこと、行政に期待すること、いろいろあるんですが、生活者ひとりひとりができることに、どんな事があるのでしょうか。



1つ目は「長く着る」ということです。服が安くなる中で消費のスピードが速くなってしまっています。一着を長く着ることが、もっとも環境負荷を減らせる事なので、今持っているものをケアして長く着ることが一つです。

でも、どうしても飽きてしまうこともあると思うので、自分ひとりでこの服の寿命を全うせずとも、他の人に受け継ぐこともできます。



それで、2つ目に「交換する」。今日ちょうど資料の封筒の中に、札幌市のリサイクルプラザで行われている「Xchange（エクスチェンジ）・洋服の交換会」の案内も見たんですが、まさにそういったことです。

自分が着なくなったものでも、ほかの誰かにとってはまだ魅力的な服かもしれないですし、服の寿命を延ばすためにすごく有効なアクションだと思います。



それから3つ目に「控える」。とにかくたくさん持っていなければならないと思わなくていい、ということです。実際、私もそうだったんですが、以前は人に会うときに前回と同じ服で会えないとか、いつも同じ服を着ていると恥ずかしい、という気持ちがありました。そうするとどんどん服が必要になりますが、あまり高いものを変えなくて、安いものを買ってしまう。

でも本当におしゃれな人というのは、自分のこだわりを持って選んだものを着ています。それがいつも同じ服でも全然かまわない。むしろその方がかっこいいんじゃないかと思うんです。



最後に「お直しをする」。以前にこういった講演会をさせて頂いた時に、終了後に声をかけてくださった方がいました。

その方はお直しのお仕事をされていたのですが、お直し希望で来られる方にお値段をお伝えすると、「じゃあ買ったほうが安いのでいいです」と帰ってしまうので、それで閉業された、とのことでした。私は、それはすごくもったいないことだと思ったんです。

私はあまり裁縫ができないので、すぐお直しに持って行くんです。ちょっと高いなと思うこともあるんですが、それでも直してもらい戻ってきた服を見ると、本当により愛着が湧くというか、またこの服を楽しめるんだなと思います。「捨てればゴミ。お直しすれば宝物」。安い新品もありますけれど、ちょっとお金をかけてお直しをすることが新しい楽しみなんじゃないかと思います。

これも服の寿命を延ばすために、非常に重要なアクションです。

こういったお直しの面白さや魅力というものが、もっともっと知られていくといいなと思います。

ありがとうございました。



## ■講演会Ⅱ

### 動き始めたサステナブルファッション

#### 【講師ご紹介】



#### 岡野 隆宏

環境省 ファッションと環境タスクフォースリーダー

1997年に環境庁（現環境省）入庁。国立公園のレンジャーとして阿蘇の草原や八重山サンゴ礁の保全再生などに携わり、2021年7月より自然環境局国立公園課国立公園利用推進室長。勤務時間の20%を活用して取り組む社会変革推進タスクフォースの一つである「ファッションと環境」タスクフォースに参加し、現在はそのリーダーをされている。

皆さんこんにちは。環境省の岡野と申します。今日は札幌で開かれるG7札幌 気候・エネルギー環境大臣会合開催の記念事業の一環になればと思い参加させていただきました。

私はもともと環境省で自然環境を担当している職員でございます。九州と沖縄の方でレンジャーをさせていただきました。

なんでレンジャーをしている者がファッションなんかやるの？と皆さん疑問に思われると思うんですけども、沖縄では地域の皆さんと一緒に、できるだけ海を汚さないようにしましよとか、サンゴを壊さないようにしましよとかいろいろやってみたんですけども、白化現象が止まらずにサンゴが死んでいくんですね。

それはなぜかという、気候変動で海水温が上がり続けているからなんです。やっぱりこの社会経済のあり方全体が、もう少しサステナブルにならなければと考えるようになりました。そんな時に「ファッションレボリューション」というイベントに呼んでいただきました。そのときはまだ私はファッションの現場のことを知らなくて、環境と経済の話を少しさせていただいたところ、ファッションに関わる業界の方々がたくさん私のとこ

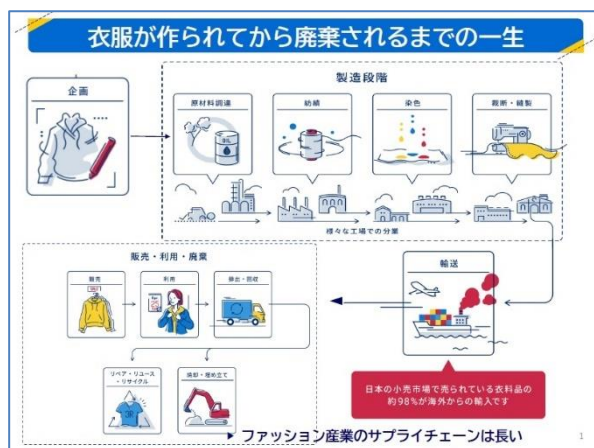
ろにご挨拶に来ていただいて「なんとかしたい。このままじゃダメなんです」という話をされたんです。こういうところだったら、いろいろ変化が起こせるんじゃないだろうかと思ひまして、今、ファッションの分野にも取り組ませていただいています。

そんな折、環境省に「20%ルール」、勤務時間の20%をこういった自分の担当業務以外に、社会変革に関わる仕事をしていいというルールができました。

そこでまずはファッションと環境の関係についてデータを集めて情報発信し、業界の方々とは意見交換をしました。その後、他省庁とも連携して何か政策を考えていこうということで、いろいろな方と議論をしながら進めさせていただいています。







服が作られてから廃棄されるには長い一生がありますが、その過程で環境負荷が生じているとされています。2015年に繊維生産から出た温室効果ガスは、12億トンの二酸化炭素に相当するそうです。これがどれだけの量かという、国際線の飛行機とか船とかそういうものを動かすための量を上回る量です。また、染色の工程では水が汚染されます。工業用水汚染の20%は、こういった繊維産業によるとされています。また、マイクロプラスチックの問題があります。合成繊維を洗濯すると、そこから糸がほつれて海に流れていきます。その量は年間約50万トンと推計されています。着終わった服は73%が埋め立てや焼却に回っていて有効に活用されておらず、経済的な損失もあるんです。この流れをどう循環型にしていくのかというのが大きなテーマとなっています。

もう一つは、人権の問題です。先ほどの鎌田さんのお話にもラナ・プラザの倒壊事故について紹介がありました。衣類を作っている人の人権、労働環境に透明性が求められています。

それから経済にも問題があります。日本のアパレル市場の衣類供給数は、1990年のバブル期から2000年にかけて、20億着から40億着に倍増しています。じゃあそれで儲かっているのかというと、市場規模は15兆円から10兆円に減っているんです。

人口は減り始めていますよね。そんな中で大量生産をし、値段が6割くらい下がっていると。価格が下がると儲からない。こうなると国内で生産するのがだんだん難しくなっ

てきます。それでどうなったかという、国内繊維業に関わる事業者数が5分の1に減り、逆に輸入が50%から98%に増えました。つまり国内産業が衰退しているんです。

ここ2、30年、日本はデフレと言われていいます。給料が上がらない。その根本的原因是、この大量生産、大量消費じゃないかと言えるんじゃないかと思います。

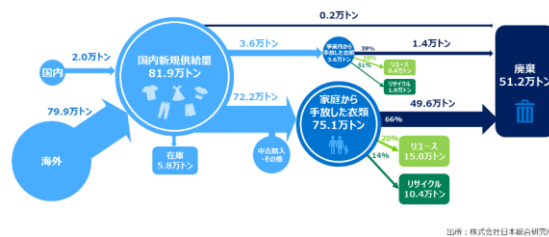
このように環境問題、人権の社会課題、経済問題、この三つをファッション業界は抱えています。つまり、環境・社会・経済の統合的向上を目指すSDGsと典型的な課題として見えてくるかなと思います。

### ファッションと環境調査結果

#### 衣類のマテリアルフロー サマリー

- 衣類の国内新規供給量は計81.9万トン（2020年）に対し、その約9割に相当する計78.7万トンが事業所及び家庭から使用後に手放されると推計。
- このうち、廃棄される量は計51.0万トン、手放される衣類の64.8%  
リサイクルされる量は計12.3万トン、手放される衣類の15.6%  
リユースされる量は計15.4万トン、手放される衣類の19.6%

#### 2020年版 衣類のマテリアルフロー



国内の衣類のマテリアルフローについて環境省が作成したデータをご紹介します。

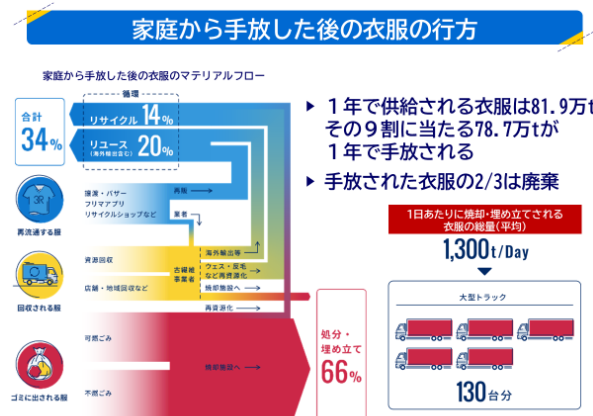
2020年の推計なんですが、国内に新規に供給される衣類が81.9万トンで、そのうち供給された分の9割に相当する78.7万トンが事業所や家庭から手放されています。そのうち廃棄されるのが51万トンです。

リサイクルやリユースされる衣類もありますが、おそらく65%が焼却や埋め立てに回っていると考えられます。できるだけ廃棄を減らしていくためには、そもそも手放す量を減らしていく、そして流通量を減らしていくこともと思います。また、リユース・リサイクルを増やしていくことが重要になります。

一つ補足がございまして、0.2万という数字がありますが、こちらは、アパレルさんや小売店が売れ残りを廃棄する量です。

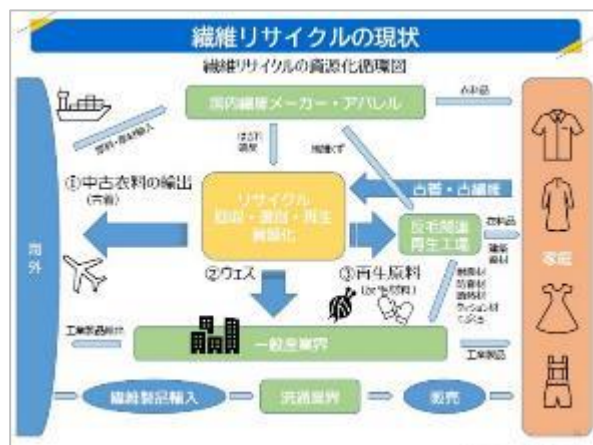
ファッションロスという言葉が聞かれたことはあるでしょうか。海外のアパレルがブランドの価値を損なわないように、売れ残り

の品を燃やしたりすることが問題となっていました。国内ではどうなのかと調べたところ、0.2万という数字になりました。



全体の量からみると家庭から手放される量が大きな課題です。一番目が古着屋やバザーの利用や、フリマアプリというものが再流通する服で、集団回収などで集められたものというのが二番目になります。三つ目が可燃ごみや不燃ごみと言う形で捨てられているわけですが、結局焼却や埋め立てになります。

アンケートで、なぜこういう手放し方をするんですか？と尋ねたところ、手間がかからないから、という声が一番多くありました。自治体での回収状況を見ると、人口比で65%が何らかの回収が行われていますが40%弱は回収が行われていないという状況です。



もともと日本は布類の再生利用が進んでいました。回収された衣類は事業者のところに集められ、選別されて、着用可能なものは多くが海外に行っています。

その次に、ウエスですね。工場などで油を拭く雑巾として使うんです。天然繊維の

綿だとよく油を取ってくれるんですが、合成繊維は油を吸わないのでなかなか使えない。そういったものは反毛という形で繊維に戻し、断熱材とか耐震材とか防音材とか、そういったものに使われます。今は技術が発達して、もう一度、繊維に戻して手袋にする技術が出てきています。

この3つの使い道のうち、この海外に輸出するのが利益になるというので、その利益で再生資源化に取り組んでいるという形になります。ウエスや反毛も昔はずいぶん工場が必要があったんですが、現在、国内工場の数が減っている中で需要がなかなか伸びない状況です。

コロナ下で、衣類の輸出が止まったということがあったんですけども、日本の衣類も数が増えて価値が下がってきているために海外でもなかなか高く売れなくなってきているんです。衣類を集めても行き先がなくなっているというのが現状で、今は集めるのをちょっと控えよう、ということになってしまっています。

そのような中、今期待されているのは、第4の出口として、繊維からまた繊維にする、衣類を集めてまた繊維に戻すということ、今、技術開発が進められています。

しかしそれを進めるには大きな壁があります。皆さん、自分の服が何からできているか見たことがありますか？

コットン100%のものもあれば、コットンと麻が混ざっているものもあるし、ポリエステルが混ざっているものなどもあります。東京周辺から実際に回収された衣類を素材別に示したデータがあります。

コットン100%が12%、ポリエステル100%のものが10%、3種類以上の素材が混ざっているのが19%、4種類以上の素材が混ざっているものが25%となっています。このようにいろいろな素材が混じっていると、リサイクルするのが難しいというか、ほぼできないんですね。

現状の技術では、コットンはもう一度綿に戻して糸にすることができます。同じことができるのがウールです。ウール100%の

服で、またウール100%のセーターに作り直せます。つまり100%のものであればそういうことができます。現状は多く見積もってもそれができるのが25%ぐらいで、それ以外は繊維から繊維に戻すのが非常に難しいという状況です。

まとめると、繊維リサイクルの課題は、大量生産による衣服の低価格化によってリユースの価値が低下し、また反毛の需要も低下していることです。結果として、市町村が回収しても行き先がない。期待されるリサイクル技術は、コットン、ダウン、ウールのような素材であればマテリアルとして、そのまま使えます。ポリエステルやナイロンもケミカルリサイクルができるようになってきました。しかし、実際は複合素材が多いということに加えて、ファスナーやボタンなどいろいろなものが混ざっていて、なかなかリサイクルが難しい。

それで、これから求められるのはリサイクルや選別技術の高度化です。それと合わせてリサイクルを前提とした服作りです。単一素材、100%にするのが一番いいんですけども、このような環境配慮設計ということが今後求められてくると思います。



さて、サステナブルファッションという言葉については、52.1%の方、つまり半数以上が認知をしており、認知をしている方のうち、7割は「関心がある」と答えています。ただ、「実行している」という方は、3.7%にとどまっています。

関心が高まってきてはいますが、なかなか行動に移せていないという状況です。その中で、何がサステナブルファッションなのか分かりやすく情報発信して欲しいと

か、衣服のリペア情報を増やしてもっと利用しやすくしてほしい、というような声が聞かれているわけです。

こういった状況を踏まえ、環境省ではファッションに向けた5つのアクションを提案しています。これは私たち生活者と同時に、企業へも同じことを呼びかけています。企業としても、より安くいいものを買いたいという私たちの希望に応えて努力された結果が今の状況なので、生活者も企業もお互いに変わっていくことが大事だと考えています。相互のコミュニケーションが非常に重要です。

5つのアクションですが、まず1つ目に、今持っている服を長く大切に着ること。2つ目に交換や古着などリユースを楽しむこと。3番目として先のことを考えて買う、要は衝動買いをやめるということが大切です。そして4番目として、服の作られ方をしっかりみるということ。服の素材や生産ルート、環境負荷などもしっかり見て選んで買おうと呼びかけています。5番目に、資源として再生利用するということを挙げています。

その取り組みとして、自治体の取り組みを一つ紹介したいと思います。

今年、環境省でモデル事業として支援をした京都市の取り組みです。京都市内のリユース事業者が、銀行などに回収ボックスを置き、リユースできるものを販売するという取り組みをしています。循環フェスという名前のイベントでは「¥0（ゼロエン）マーケット」を開催しています。

これは服の交換会で、他にもカバンやアクセサリーなどを交換したり、オーガニックの飲食ブースを設置したりしました。

そうすると若い人たちが非常に積極的に参加をして、イベント自体を盛り上げようとしてくれました。こういった取り組みを広げていこうと今、京都市さんも頑張っているらしいです。



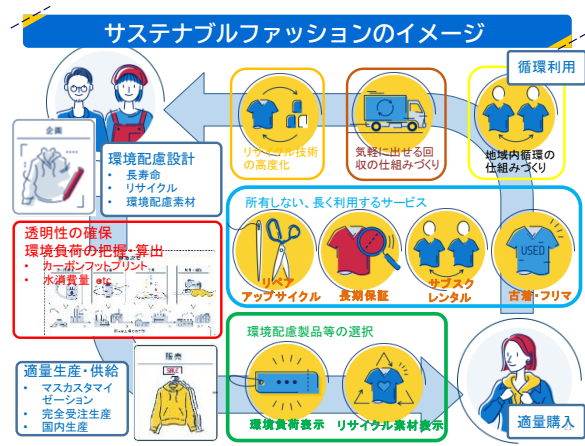


環境省でも、東京の新宿御苑で¥0 交換会をやらせて頂きました。その交換会でこんな声を聞きました。「普段、どうしても安い服を選んでしまう。でも0円だと、普段は自分が着ないような服にも手をのびせる。新しいファッションの体験ができて、ワクワクする」と。このような交換会が、もっと自由にファッションを選べる新しい気づきになる。このような効果もあるんだなど実感したところです。

「新しい豊かな暮らしを創る国民運動」についても触れたいと思います。環境問題という、どうしても我慢が必要という考えがこれまで多かったんですが、これからは環境に優しく新しい豊かな暮らしを考えていこうと、いろいろな企業や団体と一緒に取り組みを進めています。

その取り組みの第一弾としてのアクションが3つありまして、その1番目が実はファッションです。その中で、オフィスの服装改革というのがあります。自分の個性が出せるファッションを広げていく。先ほどの¥0 交換会のようなものを楽しむ。そういったことがこの輪を広げてくれる一つなのかもしれないと思います。

そのほかに住宅の断熱リフォーム促進キャンペーン、国立公園のデジタル化やワーケーションなど、生活スタイル自体をよりサステナブルにしていくという取り組みを提案しています。企業だけではなく、我々生活者と事業者側の行動変容というのが大きなテーマになると思います。



サステナブルファッションの将来的なイメージとしては、企業が服を作る段階で環境配慮設計をし、リサイクル素材を作ったり環境に配慮した素材を使ったりすること、作る過程の透明性を確保して、環境負荷を把握して、この服を作るのにどれぐらい二酸化炭素や水を使っているのを見える化していくことも重要だと思います。

その上で適量生産、適量供給をします。先ほど作っても儲からないという話をしたわけですが、そうすると企業もロスになるわけですね。だからしっかりと適量生産、適量供給をし、我々も適量を購入し、衝動買いを控える。

そのときに適正価格というのはすごく大事だと思います。これまで値段を下げるということが社会的な流れになっていて、その中でコストカットが叫ばれてこれまで値段が下がってきたわけですが、コストでカットされてきたのは、もしかすると私たちの手仕事かもしれないし、人々との関わり合いかもしれない、そう考えるとコストというものは、もしかすると「てまひま」といった人が関わる温かいものだったかもしれない。そう考えたときに、それをしっかりとした価格として購入することによって、極端な話ですが、もしかしたらデフレ脱却になるかもしれないのです。

そのようにしてしっかり選んで買った衣服を長く着るためのリペアやお直し、お下がりといったこともどんどん増えていけばいいと思います。

さらに地域内循環の仕組みづくりということで、着られなくなったものを回収する

仕組みづくりと、リサイクル技術の向上を進めて、循環させていくことを目指していきたいと考えています。

このためには、企業、生活者がお互いにコミュニケーションを取ることで、行政もしっかりと関わることが必要です。

今、環境省も経産省や消費者庁と一緒に取り組を進めています。まさに今、リサイクル技術の高度化の検討会を経産省と進めていて、なんとかこのような循環の仕組みをもっと充実させていけたら、と思っているところです。

ありがとうございました。



## トークディスカッション

## 質疑応答

### <パネリスト>

- 鎌田安里紗さん エシカルファッションプランナー
- 岡野 隆宏さん 環境省 ファッションと環境タスクフォースリーダー
- 岡本 俊幸さん 札幌市環境局環境事業部循環型社会推進課長

### <コーディネーター>

- 石塚 祐江 さっぽろスリムネット 副委員長

●石塚) こんにちは。スリムネットの副委員長を務めている石塚と申します。  
NPO 法人 環境り・ふれんずの代表理事でもあり、活動拠点では、制服や着物、食器などのリユース事業を行っています。  
札幌市のリサイクルプラザ宮の沢も指定管理者として運営させていただいています。早速ですが始めに、札幌市の古着リサイクルについて、循環型社会推進課の岡本さんからお話をいただければと思います。

●岡本) 札幌市の一人当たりの1日のごみの排出量は政令指定都市 20 市の中で 4 番目に少なく、ごみの少ない街を目指しています。衣類も大きなテーマです。  
資源としてもったいないということもありますが、特に合成繊維は石油由来ですから、燃やすと二酸化炭素の排出という問題が出ます。コットンはカーボンニュートラルではありますが、燃やすとやはり二酸化炭素が排出されます。年に 3 回ほどごみ



の開封調査を行っているんですが、年間8千トンくらいの服が燃やせるごみとして排出されています。

資源として出されるペットボトルの回収量も同じくらいの8千トンです。こちらはリサイクルされますが、衣類は焼却されています。意識調査では、フリーマーケットに出したりリユースしたりしています、という回答もありますが、7割が燃やせるごみに出している、と答えています。

地区リサイクルセンターなど市内10か所の回収拠点で回収もされていますが、リサイクルするだけではコストと環境負荷がかかるので、今後、排出量を減らす必要があると思います。ほかにも、食品ロスやプラスチックごみも減らしていきたい。市民だけではなく、事業者とも協力して取り組んでいきたいと考えています。

●**石塚)** 札幌市もいろいろなごみ減量の取り組みを行っていますが、入口のほうからについても、皆さんと考えていきたいですね。ではここで、会場の皆さんからたくさんの質問が届いていますので、それぞれお答えいただきたいと思います。

●**質問)** 服の製造工程で大量の水が消費されているということですが、具体的にどのような目的で大量の水が使われているのですか？

●**鎌田)** コットンは乾燥地域で育てられます。栽培のために大量の水が必要です。そのあとの製造の過程でも大量の水を使います。このように農業用水に大量に使われると、飲み水などの生活用水が不足するので問題視されています。

●**質問)** 大量生産は、なぜなかなか減らないのでしょうか？

●**岡野)** 衣類は生産拠点がどんどん海外に移っています。その中で、だいぶ早い段階で見通しを立てて作っている。また業界の中で「過去の売上げを越えなければならぬ」という意識があって、生産量が下げられないということがあっています。私たち生活者もつい安いものを選んでしまう。生活者も変わりながら、いかに企業に訴えていくかが大切だと考えています。

●**質問)** サステナブルファッションが当たり前の中になるためには、どのような活動をしていけばいいでしょうか。繊維から繊維にするのもお金がかかります

●**岡野)** リサイクル技術も向上し、企業も努力はしていますが、リサイクルにはエネルギーがかかり、リサイクルだけでサ



ステナブルというのは限界があります。これだ、という解決策はなかなかないのですが、一方、50年前はそうではなかった。実は今が変だということです。もともとは必要な分だけ作り必要な量を買って、長く着て、それが経済的にもうまく回っていました。しかし時代が変わり、どんどん新しいものを作って新しいものを消費させるという流れになりました。これは衣類に限らないんですが、それで大量生産・大量消費ということが起こっていると考えると、その振り返りが必要ですね。それは、そもそもどんなふうに服が作られていて、どんな過程を経て、私たちが着てどんな喜びを感じているのか。これを私は「物の物語」と呼んでいます。物と向きあうというのは、物の物語を感じるということです。その物語を誰が書き始めて、自分はそれを書き終わる人な



のか、書き続ける人なのか。誰かに渡せばその物語は続いていくわけです。そうやって物との付き合い方を考えていくと、実は暮らしはもっと豊かになるのではないかと思えます。

- 質問)** サステナブルファッション、できることはやりたい。でもおしゃれもしたいけど、環境も考えたい。この兼ね合いはどうですか？
- 鎌田)** おしゃれをすることと環境に配慮することは両立しないのではないかとよく言われていますね。私も昔は、たくさんの服を持っていてコーディネートをすることがファッションブルだと思っていました。でも、おしゃれだなと思う人がたくさん服を持っているかという、実はあまり関係ないんです。ファッション業界でも、おしゃれだなと思う人の中には、いつも同じ服の人がいるんです。自分の好きな服が本当にわかっている人は実はシンプル。周りの価値観に惑わされないですね。自分の好きなものがわかっていない人は、自分がこの服を着てダサくないか、人から見てどうか、と心配になり、雑誌などで「今これがおしゃれ」などと書いてあると、つい新しい服を買ってしまう。人から勧められてではなく、自分が好きな服、自分に似合う服をわかっていると惑わないのです。だから、おしゃれとファッションが両立しないことはないと思います。
- 質問)** 消費者の意識行動をポジティブに変化させるために大切にしていることはありますか。また、これまでの市民とのかかわりでインパクトがあったことは？
- 鎌田)** 服は「買う」という体験がほとんどだと思うんですが、生産者側の体験をすると意識がガラリと変わります。コットンを育てたり、シンプルなスカートを作ったりして「服を作るのって大変、こんなに時間がかかるんだ」ということがわかると、適正価格の見方が変わります。
- 岡野)** 社会の問題と、環境保全を一緒に解決できる道を探す、それが一番、意識を変

える道かと思えます。これからは、サステナブルや環境のことも視点に入れないと会社も立ち行かなくなりそうですよ、という話をすると企業も変わります。



- 岡本)** 出し方によってお金がかからないとか、集団資源回収に出すと奨励金が出るとか、回収業者で買い取りがあるというような経済的なインセンティブがあると変わっていきます。そうやってこれまでも成果が上がってきたと思いますが、それと併せて、なぜ減らさなければならないかという、環境や生産者のことも伝えていく必要があると考えています。

- 質問)** サステナブルファッションの普及のために教育現場でできることは？

- 鎌田)** 綿を育てて、体操服など自分が着るものに使うと体感できます。小学校でミニトマトなどを育てるように、自分で育てる、その服バージョンをぜひ全国の小学校でやってみてほしいです。



- 石塚)** 昔は家庭科で雑巾やスカートなど作ったりしましたね。そんなことが子供たちの衣類を大切に作る気持ちにつながればいいと思います。

- 石塚)** 札幌で「G7 札幌 気候・エネルギー・環境大臣会合」が開催されますが、それについての期待など、それぞれ一言お願いします

- 鎌田)** 札幌市は先進的にごみを減らす取り組みをしていると思いました。衣類を回収して生かしていく仕組みなど、ここから全国的に広がってほしいと思います。

- 岡野**) 産業界がどう変わっていくか、今、国際的に注目されていて、企業も意識が変わってきています。一方、サステナブルなファッションを作っても売れない、生活者には理解されないということも聞いています。私たちのライフスタイルをサステナブルに変えていく必要があります。北海道なら地産地消などにも力を入れていますね。そういった事業サイドの取り組みを札幌市の会合で PR され、それが世界に広がってほしいと思っています。
- 岡本**) 大臣会合が行われる 4 月 15 日・16 日、札幌ドームで「環境広場ほっかいどう 2023」という、環境をテーマにしたイベントを行います。企業と消費者との懸け橋になれるように行政もしっかり行っ

ていきたいと思っています。

- 石塚**) 持続可能なファッションが環境につながっている、服の選び方で環境が守られる、みんながこういったことを知り、持続可能な社会を目指していくことにつながっていけばと思います。今日はありがとうございました。



## お時間がきてしまい、会場でお答えできなかった質問について 講師の方よりいただいた回答を以下に掲載します

**Q:** Who made my clothes? のプロジェクトでは誰が作られた服なのかがわかる良いプロジェクトだと感じました。このプロジェクトは一定の期間や企業が参加しておこなわれているものなのでしょうか？

- 鎌田**) 4 月 24 日が FASHION REVOLUTION DAY、その日を挟む 1 週間が FASHION REVOLUTION WEEK で世界中でイベントが行われます。ぜひ、ご自身の購入しているブランド、好きなブランドに質問をしてみてください。私たちの方でも 4、5、6 月にイベントを行いますので、よろしければ FASHION REVOLUTION JAPAN のインスタグラムアカウントをご覧ください。

**Q:** 繊維リサイクルでは合成繊維（複数の繊維の混合）は現在の技術ではリサイクル出来ないのでしょうか？今後技術が発展していった場合、リサイクルできるようになるのでしょうか？

- 鎌田**) 複数の素材が混ざっていると、今は分

離してどちらも活かすリサイクルはできません。技術開発はこれからです。

**Q:** フリマアプリは便利でリユースにも一役買っていると思いますが、一方「飽きたらフリマアプリで売ればいいや」と安易に服や物を買う人も増えたように思います。これについてどう思いますか？

- 鎌田**) そういった側面もあると思います。一方で、リセールバリューを考えて、質の良い服・長く使える服を選ぶ流れもあるようです。フリマアプリ自体はツールですので、どのように使うか次第だと思いますが、自分 1 人ででも、他の人に受け継いででも、長く大切にしたいと思える服を購入するようにしたいですね。

**Q:** 気候変動とファッションの関わり（農や働く方々、..）という観点で消費者や、作り手が意識したらよい行動について伺いたいです。

- 鎌田**) 自分の仕事の前後にどのような仕事か

あるのか、どのような人々の仕事を経て、自分がそれを手にすることができるのか、できるだけ現場に足を運んで、双方向のコミュニケーションが取れるとお互に楽しく、学びがありますね!

**Q:** アパレル業界の慣習である年2回のセールをなくす事は出来ないのでしょうか?

●鎌田) もはや年2回どころではなく、年中どこかでセールが行われていること、本当に問題だと思えます。規制という手段もあるのかもしれないですが、私たちが服を買うときに、セールになるのを待つだけでなく、適正価格で購入する意思を持つことも重要だと思えます。

**Q:** 衣服の処分を焼却すると埋め立てよりもエネルギーは消費すると思いますが、長いスパンで考えるとどうなりますか?

●岡野) 焼却するとエネルギーがかかりCO2も排出しますが、埋立ても土地が必要になりま

す。現状ではリサイクルは難しく、エネルギーがかかる状況です。ですので、しっかり選んで長く着るのが一番環境負荷は小さくなります。

**Q:** 着なくなった服を海外へ送る事をしてきましたがチリのアタカマ砂漠の不法投棄の映像を見て考えてしまいました。海外へ送るとい時難民キャンプのような所へ送って欲しいという要望を聞いて頂けると有効利用という事になるのでしょうか?

●岡野) 不法投棄のニュースは本当に驚きました。みなさん工夫をしながら海外に送られています。最後の最後にどうなるかはなかなか把握できないようです。また、海外に服を送った場合に、地域の産業に影響を与えているという指摘もあります。自分で出したものは自分で始末する。その基本に立ち返ることが必要かもしれません。

